



Title	戦前期日本のポスター用原画製作における海外雑誌の活用について
Author(s)	田島, 奈都子
Citation	デザイン理論. 2023, 81, p. 50-51
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91062
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

戦前期日本のポスター用原画製作における海外雑誌の活用について

田島 奈都子 青梅市立美術館

研究の端緒

戦前期の日本において図案家として活動した人物の回顧録には、当時参照していたものとして、イギリスの『コマーシャル・アート』と、ドイツの『ゲブラウスグラフィック』の二誌についての言及が多い。しかし、洋雑誌は国内の所蔵先が限られることから、誌面の詳しい調査はこれまで十分に行われず、参照実態とその結果についても検証されてこなかった。

一方、近年の新型コロナウイルスの世界的な流行によって、日本国内においても図書館や大学などの利用が大幅に制限され、結果的に調査研究は停滞や遅延を余儀なくされた。

そこで、コロナ禍でも継続実施可能な調査方法として論者が採用したのが、自宅のパソコンからアクセス可能な IADDB の活用であり、本データベース上で公開されている洋雑誌の総覧からは、予想以上の収穫があった。

IADDB とそれを用いた研究方法

IADDB とは International Advertising & Design Database (<https://iaddd.org/>) の略称であり、2014 年にオランダで設立された非営利団体によって運営・公開されている、広告デザインに関するデータベースである。ポスターを中心に据えているものの、コマーシャル（映像）や音楽、デザイナーやディレクターに関する情報、主要作家のモノグラムの一覧などのコーナーがある。

なかでも、Magazines & Journals のコーナーにおいては主要な欧米のデザイン関係の雑誌が、著

作権の切れたものに限られるとはいえ、ネット上で全ページ、カラーで閲覧できるようになっていることから非常に利便性が高い。

従って、本研究では戦前期日本において、図案や広告に携わる人物が参照していた『現代商業美術全集 全 24 巻』（アルス）や『広告界』（誠文堂新光社）や『宣伝』（日本電報通信社）に、図版や記事が転載されていた雑誌を中心に総覧し、当時の日本製ポスターとの関係性を探ることにした。

専門誌における作品の掲載状態

欧米において編集発行されていた専門誌とはいえ、1890 年代から 1945 年まで誌面における作品掲載実態は、ほとんどの図版がモノクロで印刷で、名刺大以下の大きさであった。また、翻案とされた作家の出身国は多岐にわたり、一般的に思われがちな、フランスやドイツ国籍者に限定されていたわけではなかった。ただし、著名作家の作品は、いくつもの媒体に紹介されたり、リバイバル的に紹介されたりすることもあった。この結果、一部の作家は露出する機会をより多く獲得し、長きにわたって影響力を持つことにもなった。

1930 年代に入ると、絵筆で描いた作品のみならず、写真を用いた作品が掲載される機会が増えたが、この時代はナチスが台頭してきた時代とも重なることから、ユダヤ人（系）の作家の場合は、仕事上の問題のみならず政治的な問題から、出身国以外で活躍すること余儀なくされた者もいた。なお、特定の作家に特化した特集が組まれる場合もあり、そうした号や記事は、当時の各人の活動

実態や履歴がわかることから、今日では貴重な資料となっている。

戦前期の日本製ポスターに見られる翻案の実態

戦前期に編集発行されていた、外国の主要なデザイン関係の専門誌を、IADDB上で総覧した結果は、1920年代半ば以降の日本製ポスターの多くが、それらに掲載されていた外国人作家の作品を翻案としていたという事実である。しかもその度合いは、「参考」や「影響」という表現を遥かに超えた、「剽窃」に近い直接的な翻案例が多かった。それが証拠に、カラーで紹介されている作品の場合は、彩色までもが踏襲されている。

ただし、雑誌掲載の時期と日本における翻案化までの時差は、作品によってまちまちであり、かつ翻案化された作品は商業ポスターのみならず、公共ポスターやプロパガンダ・ポスターにまで幅広く、実際には雑誌表紙、新聞や雑誌広告などにも見られ、後者の方が翻案化は早かった。

また、元作品が写真を用いたポスターであっても、日本において翻案とされる際には、絵筆で描き起こされ、多色化が図られることが一般的で、同時代の日本製ポスターの中で「異質」な作品ほど、海外作品を翻案としている確率が高かった。

なお、こうした行為は力量の乏しい無名な作家や、現在では名の知られていない企業が行っていたと思われがちであるが、実態としては図案家として著名な人物、ポスターの依頼主として存在感を示した企業の作品ほど、翻案例が多く見つかり、懸賞募集の上位入賞作にも、同様の傾向が見られることは甚だ遺憾である。

ちなみに、このような日本の図案界の実態については、2022年7月に文生書院から刊行した拙著『ポスター万歳 百窃百笑』に記しており、詳しくは同書でご確認いただきたい。

結論及び今後の課題

本研究によって実証された、戦前期の日本製ポ

スターのある部分が、外国作品を翻案としたものであったことは、非常に残念な事実である。しかし、それが事実である以上、今後はこれらを踏まえた上での日本のポスター史の編纂や、作家や作品の評価を行っていかねばならないと思う。

また、従来の日本のデザイン史研究においては、外国作品からの影響について論じる場合も印象批評的なものが多く、実証的なものが非常に少なかった。そしてこの背景には、外国で編集発行されていた資料を、国内で閲覧することが難しかったことが関係している。しかし、IADDBが存在し、その活用によってある部分が補える以上、今後は日本の研究者もこのデータベースを積極的に活用すべきだと考える。もっとも、IADDBにはアメリカで編集発行された雑誌が元来少なかったり、1930年代に入ると世界的にも広告界においては、写真が台頭してくるものの、この分野の専門誌がほとんど網羅されていないなどの偏りもある。

こうしたことを踏まえて、論者は今後の課題として三つのことを挙げたい。

第一には自身が専門とする、戦前期の日本製ポスターの実態を解明するためには、より広範囲な同時代の外国雑誌の閲覧が必要と考え、現在はアメリカを代表する婦人向け雑誌であった『レディーズ・ホーム・ジャーナル』の閲覧に着手し、すでに予想以上に多くの翻案例を見つけている。

第二に、個性的な作品ほど外国作品からの翻案であった事実は、改めて論者に対して、この時代の日本製ポスターの特徴が何かを再考することを促し、現時点ではいわゆる「美人画ポスター」がそれに該当するのではないかと考えている。従って、この件に関しては同時代からそれ以前の、国内外の美術やデザイン界の動向を幅広く視野に入れながら、その実態について調査研究していきたいと考えている。

第三に、戦前期の日本における著作権意識と、それを取り巻く国際情勢についても資料を収集し、実態の解明を進めていくつもりである。